SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

暮らしと密着した自主防災：公民館が活かす自然、知恵、結の心 (生涯学習指導者研修事業「公民館の力を磨く」)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 礼子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009483

基調講演

暮らしと密着した自主防災
～公民館が活かす自然、知恵、結の心～

藤井 礼子（島根県浜田市立安城公民館　主事）

■弥栄町の現状と公民館GP事業の背景

まず初めに、弥栄町をご紹介します。皆さん、島根県はご存じですか。私は生まれと育ちが埼玉と東京です。田舎暮らしがしたくなり、小中学生の夏休みに何度か祖父母を訪ねていて土地勘のあった島根県に、15～16年前に戻って来ました。

島根県西部に位置する浜田市から30kmほど山間部へ入った、広島県との境の方に弥栄町があります。安城地区は弥栄自治区の真ん中辺りです。弥栄町は標高356mに位置し、周りを700m以上の山々に囲まれています。ブナの原生林や県東部の赤名湿地ぐらい広大な未開発の湿地帯があり、貴重な高山植物や野生動物が生息していて、浜田市の水と空気の源になっています。また、近隣市町村と比べて年間を通して気温が3～5℃以上低く、県西部で最後までコシヒカリが作れる場所だといわれており、127haの田んぼで作られる約600tの米が主力の生産物となっています。畑では若い農業後継者数人が起業して、有機栽培で施設野菜を作っているほか、70歳以上の方が家庭菜園をしており、年間で約100種類の野菜、10種類の果物、約20種類の加工品が自給されています。ただ、まとまった量がないため、町おこしの産業には発展していません。

これからいつもの公民館活動と別の形の公民館活動、もしかしたらまちづくりや地域振興につながっていく可能性のある活動についてお話しします。チャンスは今です。地域の人たちが何かに気づいて動きだしたとき、町は変わります。公民館は公民館流を伝え続け、この町で一緒に暮らしてきてよかったと思えるような豊かな田舎を提案していきます。

いつもの安城公民館はサロンとなっています。一日中誰かが来て、いろいろな話をしています。冷暖房が効いていて、無料でコーヒーが飲める、町のたまり場です。弥栄会館の中では、各種生涯学習サークルが自主的にそれぞれの活動をしています。公民館もさまざまな事業に取り組んでいて、そこには強力なサポーターである運営推進委員、アドバイザーの派遣社会教育主事や社会教育委員がいます。また、生涯学習サークルの仲間とは少し離れて、得意な分野で仲間づくりをしていく倶楽部活動を仕掛け、個人の学びを地域の活動にしていく、あるいは個人の知恵や技を地域の宝物にしていく活動を行っています。

図1は、平成27年度の浜田市立安城公民館事業プログラムです。浜田市教育委員会の教育方針と基本的機能に基づいて、安城公民館の活動基本方針が定められています。私厚連（私立学校厚生事業連絡会）からの委託料で事業は目的別に大きく八つに分け、それぞれについて具体的なプログラムを示しています。行政や行政の他部局、地域の団体や学校に「公民館は何をしているのか」と聞かれたときに説明できるよう、この事業プログラムを作成しました。

いつもの公民館の事業プログラムに県・国の事業を組み入れることで、今ある公民館事業の拡大を図っています。今日は公民館GP事業（文部科学省委託事業「公民館等を中心とした社会教育活性化支援プログラム」）の地方創生の取り組みをご紹介します。この動きの裏には、地域課題にみんなで一緒に取り組んでいくに当たり、私厚連からの委託料、つまり予算が足りないという公民館の悩みがありました。サロンから聞こえてくる地域の生々しい悩みや不安を一つずつ整理していくと、普段気がつかなかった現実が見えてきました。そして、私たちに何かできることはないかということで、ないものがあり過ぎる弥栄から、あるものを活かした豊かな田舎を探し、「防災」をきっかけに、子どもから高齢者まで、老若男女誰

浜田市教育委員会	安城公民館	事業名	事業目的	事業プログラム
＜教育方針＞ 公民館等、社会教育施設を拠点とし生きがいのある充実した学習社会と支えあう地域社会の形成をめざす ＜基本的機能＞ ・社会教育の特性を活かした学習拠点としての機能 ・地域づくり、地域の課題解決に向かう人材を育成する機能 ・人々が楽しく過ごせる拠点（居場所）としての機能 ・生活課題を語り合い、解決につながる各種相談の場としての機能 ・地域ぐるみで子どもを育む機運を高める機能 ・団体等に対する活動支援及び、ネットワーク構築機能 ・地域情報の収集整理、受発信機能	＜活動基本方針＞ 地域の活性化を推進する機関として又、生涯学習推進の拠点として、地域の意見を十分にすいあげ、時代に沿った公民館運営に向け、安城公民館運営推進委員と共に関わりをもち、笑顔と対話に重点を置き、気軽に地域住民が立ち寄れる公民館づくりをめざす 運営推進委員との共動と、地域の協力体制の拡充をはかる 弥栄自治区の自然・資源を活用した。体験・交流を中心に生涯学習機会を提供する 安城地区まちづくり推進委員会との連携をはかり、地域活性化のために活動する 安心な町ここで暮らしてきてよかったと思える弥栄をめざす「おいしいむら」で縦割り行政、住民を繋げ、防災でまちの自主防災の仕組みを整えていく	公民館体験学習事業	・人材発掘やリーダーの養成 ・活動団体や地域の方との交流 ・弥栄の自然を通して色々な活動を行い郷土教育をめざす ・地域の方が地域の子どもたちを育てる意識を高める ・地域の子どもたちのキャリア教育の機会を提供する ・子どもたちの学習習慣や基礎体力向上をめざす	弥栄っ子夏合宿 弥栄っ子体力up教室 夏）大田クロスカントリー 秋）石見空港マラソン 冬）出雲ロードレース
		ふるさと教育推進事業	・公民館、小学校や中学校との融合事業 ・高齢者ボランティアグループと子どもたちとの交流を図る ・学校教員が地域と関わろうとする意識を高める ・地域の方が学校の学習活動に関わることで地域の子どもを地域で育てる意識を高める ・大豆の栽培、収穫を通しての農業体験 ・中学校-ふるさと弥栄を学習、これまでの経験、体験から地域の未来を考え、提案する	農業体験①～④ 祖父母との交流会 歴史学習／平和学習 豆腐・味噌作り 弥栄中総合学習 特別支援学級交流会　他
		子ども活動支援事業 ■家庭教育学級	・子どもの食を考える親の会の活動支援 ・地域の同世代の仲間づくり、交流の提案 ・家庭教育を目的とし、親子参加を呼びかけ、活動を通じて家庭の持つ機能を再確認する ・子どもたちのために安心して集える場、地域の大人とのふれあいの場を提供する	子育てサロン開設 情報交換の場を設定 食育をテーマに学習会 ふれあい広場開設
		弥栄再発見事業 ■高齢者学級	・伝統行事の復活や、弥栄に残る文化等を記録映像に残す ・住民と一緒に地域課題をみつけ解消のための打開策を探る ・安城地区に残る史跡、文化財を明らかにし、後世に残し、文化を記録保存する ・他地域の学習、研修会を実施する ・安城地区たばやしの保存活動を行う	記録、保存活動 冊子作成 たばやしの唄保存 伝承活動の支援・啓発 ふるさと伝承同好会支援
		生涯学習支援補助事業	・生涯学習サークルの活動支援 ・住民グループの要望がある学習会を専門的に行うため講師紹介、講師料の補助を行う ・食文化の伝承や郷土教育をめざす ・地域の資源を活用した講習会の開催	研修会の開催 会場の提供、活動支援
		公民館団体支援事業	・地域の団体が主催する事業を社会教育の立場から活動の支援を行う ・公民館が関わることで地域の団体の活動を広げていく	弥栄とんど焼き・節分祭 浜田市エコ活動
		ふれあい交流事業	・生涯学習サークル、地域参加の交流会 ・学習成果の発表の場、公民館活動の報告会の場	安城公民館まつり 浜田市公民館活動研修会
		広報活動	・公民館活動を地域に伝える ・住民との情報交換と、情報発信を目的とする	毎月公民館だより発行 弥栄会館情報コーナー

図1　平成27年度浜田市立安城公民館事業プログラム

もが必ず関わる食をテーマとして、地域課題の解決に挑戦するというのがこの事業の大きな特徴です。またそれは、これまでの公民館からの脱皮の始まりでもありました。

弥栄のような中山間地を取り巻く現状には、大変厳しいものがあります。急激な人口減少で高齢化率は約47％と、5年先の絶望的な状況に不安を抱えて日々を暮らしています。私はこれまでに2回、仙台市へ行きました。東日本大震災の被災地である南三陸も訪れました。想像以上の厳しい現実を目の当たりにして足がすくみましたが、そこで感じたのは、災害には2種類あるということです。一つは一瞬にして大切なものがなくなってしまう自然災害、もう一つは地域課題に押しつぶされて、じわじわ町がなくなっていく災害です。今回の取り組みにはこのような背景がありました。

■なぜ「公民館が防災？」

それでは、どうして公民館が防災に取り組むのか。行政の理解も関心もある防災という言葉には、不思議な力があります。行政は防災の仕組みをつくり、公民館は住民にできる防災を提案する。その連携の糸口を探し、普段の生活から備えを考え、公民館の地域への思いをまとめてみようと思ったのです。

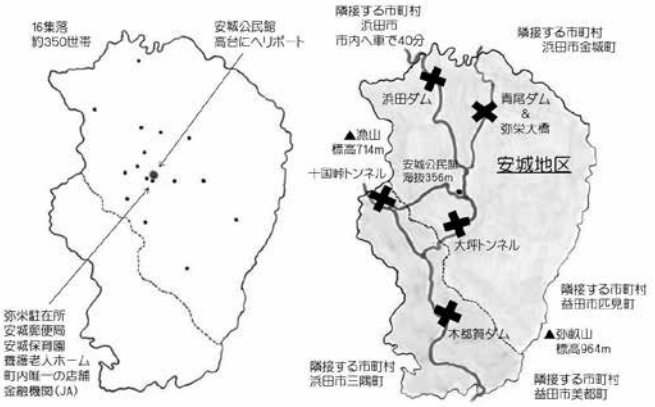

図2　防災の視点から見た弥栄町

防災の視点から、みんなで地域を見直すきっかけとして、弥栄の地図を作ってみました（図2）。左側の地図の大きな丸は公民館のある弥栄会館周辺、小さい点は集落分布です。右側の図の中心に安城公民館がありますが、弥栄町は周りを山々に囲まれており、主要道路にはトンネルとダムがあるため、大きな災害が起これば安城地区は陸の孤島になることが分かりました。しかも、病院は医師が亡くなった後、再開されないままで、この地区には小学校の保健室と老人ホームの医務室しかありません。地域の現状が分かり、万が一のときの予想もつかないほど不安になりました。

普段の公民館は一日中人が入れ替わり、サークル活動もあって、地域のたまり場になっています。子どもたちは当然のごとくやって来ますし、健診などの待合所にもなります。地域の情報はここへ集まり、情報と人をつなぐことができます。そこで、今回は防災について公民館に何ができるかを考えてみました。

この地区には田んぼがあるので、それがダムの代わりにならないだろうか。大雨が降ったときには田んぼに水をため、川の増水が収まってからその水を川に流せば、下流域に一気に水が流れていかないだろう。食糧の備蓄倉庫も必要だとは思うけれども、ここなら家の庭先の畑に食べるものを作っておけば、山の食材を知っていれば、あるいは乾燥させて食材を保存しておけば、そう慌てることはないのではないか。なぜならそれは普段の生活そのものだからです（図3）。

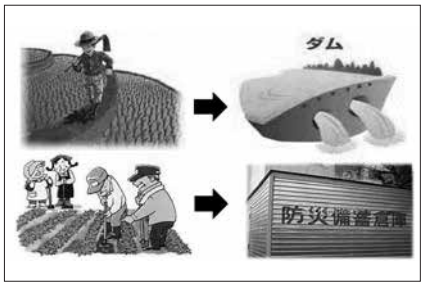

図3　田んぼはダム、畑は備蓄倉庫

ある備蓄倉庫の中を見せてもらったことがありますが、長期保存できるレトルト食品や、災害時に必要だと思われる道具がたくさん積んでありました。賞味期限や数量の管理など、正直に言って、備蓄は大変だと思いました。地域の人は、普段から気の合った仲間や家族と集まり、季節ごとにおいしいものを作っています。もちろんおすそわけすることもあります。1週間ぐらい買いものに行かなくても、家にあるもので過ごせると聞いたこともあります。これがすべてではありませんが、レトルト食品やカンパンに代わるものが既にここにはあるのではないでしょうか（図4）。

図4　保存食が非常食

さらに、万が一ライフラインに支障が出ても、水は山にあります。通信手段は集落ごとに防災無線が設置されています。電気が止まっても、復旧するまでの間、少量の電力なら何かで発電できるかもしれません。また、ガスが止まっても、まきや炭があります（図5）。そのように地域を見渡し、普段の生活の中から無理なくできそうな備えについて、公民館の思いとして地域へ提案していきました。

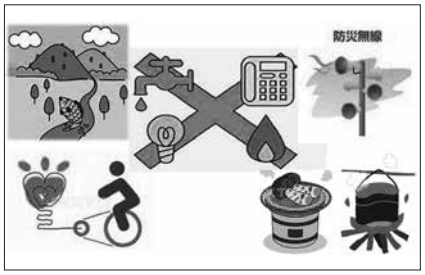

図5　自前のライフライン

図6は公民館の地域への思いを、シーソーという形で表したものです。これまでの弥栄暮らしで大切に守ってきたもの、生きていくためにものづくりの文化が栄え、受け継がれてきた衣食住の生活の知恵が土台となり、家族、集落、町を大切にして、困っていたら助け合うことを物差しとします。てんびんが時代の流れで、左がこれまで、右がこれからを表しています。「今、弥栄にないもの」としては、就職先、娯楽施設、コンビニ、ホームセンターなどが挙げられます。農業・林業は大きな収入源になりませんし、人もいなければ、国道も鉄道も信号機もありません。住民の中で染みついてしまった町の暮らしに取り残された古くさいイメージの田舎です。それでも、「今、弥栄にあるもの」として、田んぼや畑、山、川、おいしいものがあり、弥栄流の暮らしを必死に守ってきた人たちがいます。今、弥栄にあるものに弥栄の未来を託し、もう一度地域を知り、弥栄暮らしを学ぶきっかけづくりができないだろうかと考えます。そして、大きく発展しなくてもいいので、これ以上衰退せず、今のままの弥栄でいられるように、知る・学ぶ活動を取り入れ、よりつながり合う豊かな田舎をつくっていきたいというのが、公民館の地域への思いです。

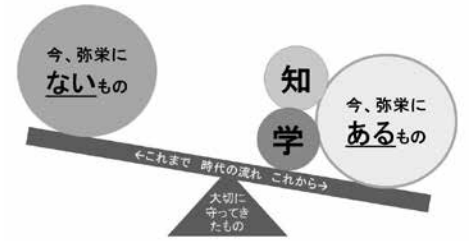

図6　公民館の地域への思い（イメージ）

■弥栄今昔物語～全３巻～

だからこそ、「今となっては昔のこと」を聞き、学び、新しいことに活かすということで、今昔と温故知新の二つのキーワードで「弥栄今昔物語～全3巻～」が誕生しました。合言葉は「防災」です。伝えて

残していくには、物語が必要です。住民の1人ひとりが、日々の暮らしの中に役割がないかを実践していきます。

3年前（2012年）から取り組んでいる、中山間地の自主防災の取り組みについてお話しします。当たり前の暮らしをいま一度見直し、いざというときを考えてみる。豊かな田舎を住民が築けば、町は変わる。そして、自主防災につながる事業を展開していきながら、古きを尋ねて新しいことに活かす。公民館は弥栄今昔物語に地域への生き残りを託します。

弥栄今昔物語の第1巻は、「自主防災の意識を高める」です（図7）。「今昔」としては、弥栄にあるものに目を向け、いざというとき自分たちに何ができるか、何を準備しておけばいいかを考えます。また、過去の災害を学び、必要な知識や対策をまとめ、これからの生活に役立てます。「温故知新」としては、老若男女問わず役割が必ずあることを踏まえ、公民館のふるさと教育を推進したいという思いに学校支援の手法を用いて、中学校1年生の総合的な学習の時間、小学校低学年の生活科の時間に「子どもたちに伝えたい“弥栄”」をプラスして授業を展開していきます。

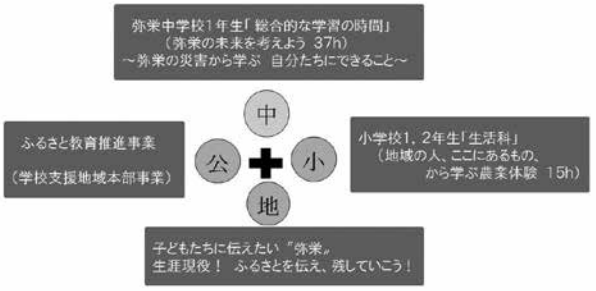

図7　弥栄今昔物語第1巻<自主防災の意識を高める>

図8は小学校低学年の生活科での農業体験です。1年かけて大豆を育て、草を取り、収穫すると、老人ホームの方が選別作業をしてくれます。そして、地元のJA加工所で学校給食用のみその加工と保管をします。出来たての豆腐を味わいながら、保存食を作るという防災活動です。小学校ではこれ以外にも、郷土料理づくりや餅つき会、炊き出し訓練なども実施しています。地域の人と子どもが顔見知りになるのも防災です。他にも学校支援地域本部事業で関わることがありますが、つなぎ役の公民館が防災を意識すれば、いつでもどこでも災害に備える活動になります。

図8　大豆の加工と保存食づくり体験（小学生）

中学では、これまで経験、体験してきたことを土台に地域課題を探し、今度は自分たちで考えて、地域の方に協力してもらいながら課題解決していきます。何かあったときに、自分たちに何ができるか。例えば自転車で発電して、ラジオや携帯の電力に使えないか考えたり、有害鳥獣の被害で農家が困っている中、命あるものを何とかできないかということで、おいしく食べて駆除に協力しようとイノシシベーコンの開発にも取り組みました（図9）。

図9　中学生による自転車発電体験（左）とイノシシベーコンの開発（右）

また、鳥になった気分で、航空写真を使って自分たちの住んでいる地域を見てみました。周囲は山ばかりで、離れたところに家があり、コンビニやファミレスはありません。初めはないものに目が向き、「やはり田舎だよね」などと言っていましたが、1年後のまとめの時期には、「あれは町に任せておこう。たまに行くのがいいよ

図10　（左）体育大会で担架リレー、（右）成果発表に向けた中間報告会

ね」という結論に変わりました。そうして学んだことを、地域へ提案という形でお返しします。

弥栄中学校1年生の総合的な学習の時間では、3年前（2012年）からテーマを防災として、「弥栄の未来を考えよう～安心・安全・居心地の良い弥栄を目指して～」「暮らしやすいとは何だろうか」「地域の災害から学ぶ、自分たちに今できること」と題して学習会を進め、秋の学習発表会で地域に提案します（図10）。お世話になった地域の方を招いてプレゼンの画面に登場してもらったり、語りの場面で名前が出るなどして、地域の方もとてもうれしそうでした。

弥栄今昔物語第2巻は「暮らしの知恵を防災に活かす」です（図11）。「今昔」としては、町の田んぼを防水ダムに、畑を年中使える備蓄倉庫にする可能性を模索します。弥栄は食があふれる「おいしいむら」であり、衣食住の生活における知恵や技はこの町の大きな宝物であることを学びます。また、「温故知新」としては、ものづくりの文化を地域に残し、保存食が弥栄の産業につながる可能性を探ります。地域に伝わる保存の知恵を学び、ここで自信を持って暮らしていくために、弥栄の文化を受け継いでいきます。さらに、家庭から地域の大人まで、この町で暮らしていくための仲間づくりも始めます。

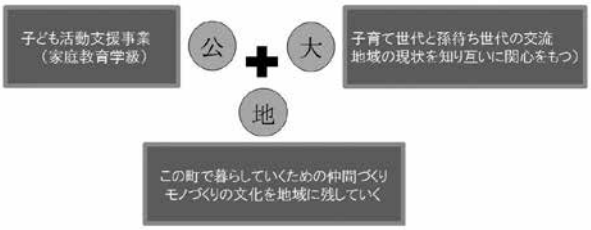

図11　弥栄今昔物語第2巻＜暮らしの知恵を防災に活かす＞

梅雨時期に入る前に田植えがあります。川の水、ため池の水のほとんどが田んぼへ流れます。夏になると、田んぼの水の上を風が走り、空気は冷えて、気温が下がります。稲を刈り空になった田んぼには今度は雪をためるので、春にはため池や川が水で満たされます。田んぼは米を作るだけのものではありません。また、畑には食べるものがあり、安心感と作る楽しみがあります。畑というのは虫や草と戦い、モグラやネズミを追い払い、種や苗の持つ100％以上の収穫を目指すという、スリルがあってわくわくするような、大変だけれども面白くておいしいところです。

家の周りには、何か必ず食べるものがあります。春から夏にかけては、天日に干す食材を確保します。例えば自家製茶や乾燥野菜などです。秋から冬は、漬物、みそ、餅などの塩漬け、発酵食品、加工品を、寒さを利用して作ります。四季折々に山や畑にあるもので上手に保存食を作るので、あとは旬の野菜と米があれば、毎日買いものに行かなくても大丈夫です。足りないときは近所でおすそわけし合うことで、忙しいけれども十分に楽しんで豊かな田舎に暮らせます。

仲間づくりでは、この町で暮らしてきた先輩が後輩に伝えていき、最後はここで暮らしてきてよかったと思える町へとつなげていきます。そして、さらに孫の世代へもこのことを伝えていきます。

図12　伝統芸能・伝統行事の継承（左：神楽、右：柿渋づくり）

文化の継承も、ものづくりの文化や伝統芸能の伝承を通して弥栄人としての仲間入りをします。伝統行事はふるさとを知るための地域の学習会になると思います（図12）。

弥栄今昔物語第3巻は「結という助け合いの精神を活かす」です（図13）。それぞれの組織や団体を理解し、信頼関係を築いていきます。住民の日々の暮らしの中に、普段から声を掛け合うまちづくりを目指します。当たり前の暮らしに感謝して、家族、近所、集落、町を思いや

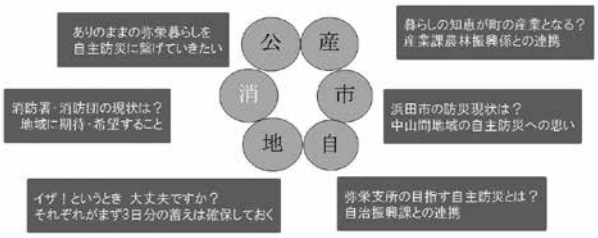

図13　弥栄今昔物語第3巻＜結という助け合いの精神を活かす＞

る気持ちを育みます。そして、弥栄はいざというとき、つらいときや悲しいとき、大変なときこそ、みんなで集まって同じ釜の飯を食べようと発信していきます。

図14は、里山減災プロジェクト第1弾のチェーンソーの講習会です。若い人たちがプロとして活躍するための応援をします。中山間地域では、災害復旧で一番先に必要なのは倒木・遊木の除去作業になります。また、プロジェクト第2弾は草刈り機の講習会です。草刈りは年に何度も行われる共同作業で、とても重要です。危険な機械をより安全に効率良く使用してもらうために、講習会を開催します。この事業は、プロジェクト会議のメンバーや「やさか爺〜婆〜さん倶楽部」、地元防災士、小中学校の校長先生、自治振興課、産業課、教育委員会、県の派遣社会教育主事等で構成されています（図15）。

図14　里山減災プロジェクトでのチェーンソー講習会

図15　多様なプロジェクト会議のメンバー

他にも消防署員の見回り、警察官の安全指導、行政の防災担当者の宿泊、プロジェクトメンバーの見守りや婦人会、運営委員の2泊3日の食事づくり、3日間の子ども避難所体験なども行われています（図16）。中山間地域で防災について考えるとき、住民それぞれに無理なくできる役割があれば、少し安心して暮らしていけるかもしれないというのが、公民館が考えた弥栄の防災です。

図16　子ども避難所体験

弥栄町の入り口には「おいしいむら弥栄」という看板が立っています。「おいしいむら」というのが弥栄村時代に目指した町おこしなら、「おいしいむら」はみんながつながる最後のキーワードです。そこで、仕掛ける公民館と支援する行政で、ガイドマップにはないような弥栄の食から始まる自主防災を発信していきます。

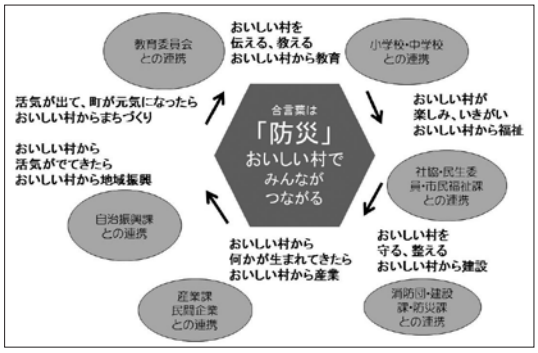

図17　公民館が目指すつながり

図17が「おいしいむら」のサイクルです。まず、弥栄今昔物語第1巻では、教育委員会や小中学校との連携で「おいしいむら」について伝え、教えていきます。そうすると、社協・民生委員・市民福祉課との連携を通して、それを伝えることが生きがいとなり、福祉につながります。さらに、消防団・建設課・防災課との連携によって、「おいしいむら」を守ることが建設へとつながります。第2巻では、産業課や民間企業との連携を通して、生きがいから生まれたものが産業へと発展します。そして、第3巻では、自治振興課と連携しながら、産業が起きて村に活気が出て、それが地域振興につながっていきます。このようにして「防災」を合言葉に「おいしいむら」でみんながつながります。

■公民館流の防災

安城公民館は平成14年に開設され、平成15年から安城公民館事業プログラムを作ってきました。今あ

る八つの事業について、防災という大きなテーマを挙げて、それぞれの活動を広げていきました。公民館事業に防災が付くと、関わる行政や団体が増えて、事業が大きく展開していきます。生涯学習を支援する公民館から、課題解決のための社会教育としての公民館へと動きだします。そこには目標や学び、教育的な視点が加わり、少し時間はかかるけれども、人が気づき、地域が変わるきっかけが生まれます。公民館は人を集めて、情報交換や学び合いを通じて、町で暮らしていく仲間づくりをする。これまでの趣味の集まりからステップアップして、防災をキーワードに、この町で暮らしてきてよかったと思える町に向かって挑戦していきます。

これまでのような公民館活動を続けていたら地域が動きだし、集落活動ではなく、仕事の関係でもなく、趣味のサークルでもない、これまでの垣根を越えた、得意なことで仲間づくりをする倶楽部活動が立ち上がりました。現在は四つの倶楽部があります。いつでもどこでも公民館の「やさか爺～婆～さん（地場産）倶楽部」、娯楽施設が一つもない弥栄で、わくわくする田舎のテーマパークを造る「畑Hatake倶楽部」、実は毎月1回防災訓練をしていた「おいしんぼ倶楽部」、会社勤めが終わったら即戦力で地域貢献という、おもてなしの心意気から始まる「おっちゃん倶楽部」です。

公民館倶楽部の大元締は「やさか爺～婆～さん倶楽部」です（図18）。イベントでの出店用テントは竹で手作りしたもので、焼き物用の炭も、暖を取るまきも買ってきたものではありません。なければ工夫する、作ってみる、あるものを形にする、みんなでやってみる。弥栄流に言えば「つろうてやろうや」という言葉になります。町のイベントで居場所があることは、集落活動を引退した元気な高齢者の方にとって、たまり場があるということです。おいしい食べ物と飲み物があれば話が盛り上がり、公民館の協力員が増えていきます。「やさか爺～婆～さん倶楽部」の出店の大きな意義は、ここにあります。倶楽部のリーダーは歴代の公民館長です。安城公民館の基本は変わることなく、常に地域に寄り添う公民館が続いていきます。

図18　やさか爺～婆～さん倶楽部

「畑Hatake倶楽部」では、地域の方の「あと5年もしたら、弥栄で米や野菜を買って食べることになるぞ」という言葉に奮い立ち、自分はもちろん、子や孫に食べさせたい野菜づくりと題して、共同ほ場で青空公民館を設け（図19）、学校給食へ野菜を送ったり、地域で即売する気まぐれ市を開催したり、保存できるように知恵を絞ったりしています。「給食がおいしい」という言葉に元気が出ます。青空公民館の畑は、年中、田舎の備蓄倉庫となります。また、田んぼは町の保水ダムとなります。豊かな田舎の親子の絆、家族の絆が共同作業から培われます。田んぼや畑は、日ごろからの住民同士の安否確認や情報交換の場となり、災害から地域を守る大切な場です。

図19　畑Hatake倶楽部

「おいしんぼ倶楽部」には、子育て中のお母さんが子どもを連れて集まります（図20）。普段から調理室に集まり、居場所づくりをすることが大切です。地域の大先輩のお母さんに料理講師に来てもらったり、倶楽部のメンバーそれぞれが講師になったりします。メンバーにはお嫁さんや、Iターンで弥栄に来た人がいて、インドネシア料理、中国料理のギョーザや中華まん、アメリカ料理のバターケーキやアイスクリーム、関西風料理、関東風料理など、味比べは国際的で、何でも作っています。材料には必ず弥栄にある食材を使っています。おいしい、楽しい、学べる仲間づくりがされています。公民館に集まることは

図20　おいしんぼ倶楽部

避難所への避難訓練、料理教室は炊き出し訓練、楽しいおしゃべりは安否確認と地域の情報収集につながります。地域で自信を持って暮らしていく準備と仲間づくりがなされ、地域の活動に備えています。さらに、「おいしんぼ倶楽部」は毎月1回の防災訓練をしています。

図21は「おっちゃん倶楽部」です。コンビニやファミレスがない弥栄町では、自分で作れないといざというときに困るので、「男子厨房に入ろう」と称して、料理を作る緊張感、できたときの喜びを学んでいます。調理の後にはお楽しみもあります。まずは普段から包丁、まな板、エプロンを身に付けることから始まり、「味見で一杯！　雪見で一杯！　合間に一杯！　できたら乾杯！」です。また、外郭組織として「いやさかの会」を立ち上げ、社会教育をとことん語る会を始めました。孤立しがちで、黒子として事業を裏で支える仕掛け人たちが、お互いを褒め合い、共感し合って、次のエネルギーを蓄える仲間づくりをします。部局や役職を超えて、地域をどうしたいかをテーマに、情報交換と事業の連携を図ります。

図21　おっちゃん倶楽部

持続可能な社会を目指すには、この町に暮らし、住み続ける住民と、時代の流れ、時に応じた情報収集や、仕組みをつくる行政が、これからもっと連携していかなければなりません。公民館は繰り返しの中に進歩も加えながら、それぞれにできることを問い掛け、提案し、小さな拠点から一緒に実践していこうと考えます（図22）。

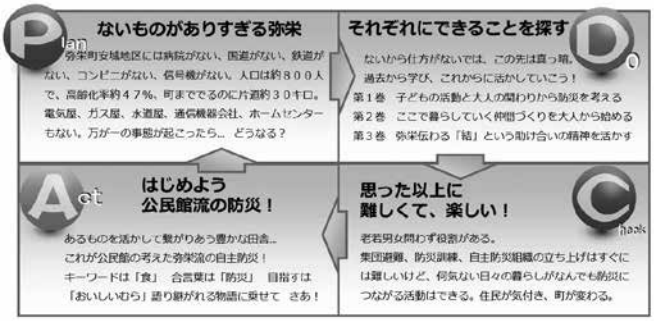

図22　持続可能な社会であるために

これから先、いつどこで災害に遭うかは分かりません。この活動が心構えの一つになり、いざというときの備えにつながってほしいと思います。弥栄での暮らしそのものがいざというときの自主防災につながる、これが「弥栄今昔物語～全3巻～」です。人はそれぞれに誰にでも役割があって、そこに仕事が生まれていきます。そのことに住民がもう一度気づいたとき、町は変わります。これからもいつまでも地域に寄り添う公民館を目指します。

最後に、今後は「おすそわけ倶楽部」というものを考えています。生産、加工、流通、販売、観光も含めた6次産業を形にして、住める町、住みたい町、住み続ける町への提案を始めてみます。

質疑応答

コーディネーター（阿部）――多くの事業、取り組みを紹介いただきました。大変盛りだくさんの内容で、これが一つの公民館で行われているとはとても信じられないほどたくさんの事業がありました。公民館職員、行政職員、あるいは学生の立場から、いろいろな質問やご意見があるかと思いますが、いかがでしょうか。

それではまず私から質問です。これだけ多くの活動拠点である安城公民館は、どのぐらいのスタッフで運営しているのですか。どこの公民館も、あるいは生涯学習交流館も、それほど多くのスタッフがおらず、しかも入れ替わりが多いと思います。安城公民館もスタッフが交代するでしょうし、館長などは頻繁に交代されると思いますが、その辺はどうなっているのか伺いたいです。

藤井――場所は市の施設の事務所の一角を間借りしています。職員は、週3日午前中に出勤する館長と私の2人です。

阿部――その人数でこのような事業をずっとされているのですか。

藤井――全部やっていたら非常に大変なので、実はいろいろなタイプの職員がいます。例えば囲碁をやっているおじいちゃんが「なんちゃって公民館職員」として電話に出たり、留守番をしてくれたり、手芸の会のお母さんたちが、留守番しながら事務所の裏の空いたスペースで活動するなど、誰かが常に事務所の中にいてくれます。

また、サークル活動は自主運営をお願いしています。最初の3カ月ぐらいは、講師の先生や会場のお世話など、立ち上げのお手伝いはしますが、それ以降は皆さんで運営していただきます。そこから発展した「やさか爺〜婆〜さん倶楽部」や「おいしんぼ倶楽部」も、ほとんど皆さんで自主的に活動されています。ただ、資金的に大変なところについては、職員が県や国の事業で予算を確保しています。

阿部――「なんちゃって公民館職員」というのは、特に何か肩書きを付与するわけではなく、公民館をサロンとしている第三者の方がいてくれるということですか。

藤井――そうです。「よっこらしょ」と立ち上がっているうちに電話が切れてしまったり、職員がどこに行って何時に帰って来るのかきちんと把握していなかったりはしますが、いつでも事務所には電気がついているよう心掛けています。

阿部――今のお話だと、県内の公民館等と大きくスタッフが違っているわけではないようですが、質問等はいかがですか。

質問――非常に素晴らしいと思って伺いましたが、ここまで来るのに何年ぐらいかかったのでしょうか。また、公民館の基本的な事業をしながらこのような活動をしてきたということでしたが、お話にあった「公民館の思い」はどういう手法で伝えていったのですか。

藤井――安城公民館は平成14年に開設したので、今年で13〜14年になると思います。私がよそから来たため、弥栄のことを知らないことに対して、地域の方々は大変危機感を持っておられ、「何も知らないだろうからこれも教えてやる、あれも一緒にやってやる」と、さまざまな形で助けてくれます。経験のない田んぼでの作業も「やってみろ」と言われてやってみると、最初は1枚の田んぼだったのが、翌年は2枚になり、4枚、6枚となって、今ではこれ以上は無理だという状態になっています。

倶楽部活動については、退任された歴代の公民館長や運営委員など、公民館をよく知っている人たちにメンバーの中心に必ず入っていただいています。そのため、基本的にあまり暴走することはありません。また、活動については公民館まつりなどで紹介することもありますが、一度ではうまく伝わらないので、今年から「安城公民館だより」の紙面の一角を使って、パワーポイントを3枚と解説をつけて地域の方にお伝えしています。それから、給食センターを通して学校給食に入っていたり、気まぐれ市を開催して収益につながっていることを伝えるなど、何か楽しそうに活動しているぞと関心を持ってもらえるような、成果が出る形の事業を考えて実施しています。

質問――小中学校の総合的な学習の時間の活用について話があったかと思いますが、公民館が学校での活動にどのように関わっているのか、また、関わったきっかけなどについて教えていただければと思います。

藤井――弥栄には小学校と中学校が一つずつありますが、以前、学校の先生たちは学校近くの教職員住宅に住んでおられたそうです。ところが、今は弥栄のことをよく知らない先生たちが、30km離れた浜田市内から通って来られるということで、今よくいわれる「ふるさと教育」がなかなかできないという悩みを持っておられました。それがきっかけの一つです。

また、文部科学省の学校支援地域本部事業により、学校に入っていくための突破口が開かれ、それをきっかけに小中学校に関わりやすくなりました。たまたま私がどちらもPTAで関わっていたこともあり、タイミングがよかったこともあるのですが、事業を形づくっていくのは本当に大変で、管理職の先生方を説得するのには非常に時間がかかりました。単発のお手伝いとして学校に入ることはできるのですが、例えば中学校の「弥栄の未来を考えよう」という全37時間の授業を、公民館と学校が一緒にやるというところに至るまでには、3年ぐらいかかりました。ただし、一度始まるとシリーズ化するので、テーマは年によっ

て変わりますが、今年度4回目となり、だいぶ定着してきています。

質問――最後に紹介があった6次産業化に向けた「おすそわけ倶楽部」の概要を説明していただければと思います。

藤井――ここだけの内緒の話にしていただきたいのですが、弥栄で持っている知恵を産業にして、お金に変えるということを考えています。今は防災がメインなので、弥栄にあるものでカンパンやカップラーメンに代わる防災食が作れるのではないかと思っています。連携先は、今回は行政や学校、地域の倶楽部などではなく、地元のNPOや企業、パッケージングに関わるデザイナー等になります。成功した暁には、サンプルをまたご覧いただきたいと思います。

また、島根大学教育学部の皆さんと連携している事業があります。弥栄町には学習塾がありません。そろばん教室がありますが月謝もかかり、なかなか多くの子どもが参加できません。後は夜間の大人の習字教室しか学びの場がないのです。そこで、夏休みの最後の3日間「宿題追い込み強化合宿」と称して集落の集会所を貸し切り、島根大学教育学部の学生に張り付いてもらって、苦手科目を克服したり、宿題を終わらせたりしています。島根大学には1,000時間ボランティアという体験活動時間が認められていて、その3日間もそれに当たります。日当はありませんが、経費はゼロ、食事は食べ放題ということで来ていただいています。それから、浜田市には島根県立大学があり学生さんにイベントの手伝いや盛り上げをしていただくなど、大学との連携があります。

質問――ご説明の中にプロジェクト会議というものがありましたが、どういう形でやっていらっしゃるのか、具体的に教えてください。

藤井――文科省の防災対策事業を申請する際に、さまざまな機関とネットワークを持つことが第一条件に挙がっていたことから、各支所の担当課、地元の方、小中学校の校長先生、消防団、防災士、県の職員、市の職員で構成しました。自分たちがそれぞれの分野でできる防災と、連携できることは何かということを一つのテーブルに吐き出した、画期的な会議でした。この事業の効果等の検証もプロジェクトメンバーに兼ねていただいたのですが、このようなメンバーが一つのテーマで一つのテーブルに着くことは、弥栄町でも浜田市内でもなかったことです。

質問――年に何回ですか。

藤井――年に2回です。

質問――公民館がサロンになって、みんなのたまり場になっているというお話だったのですが、みんなというのは、例えば年齢層は私のような学生からお年寄り、社会人等も含めて全員なのでしょうか。どういう方が来ているのか知りたいです。

藤井――公民館は平日の8時半から17時15分まで開いています。対象は全町民です。ただし、普段来られるのは、夕方からは子どもたちが多く、日中は高齢者が多いのが現実です。

質問――今は人口流出が問題になっています。少子高齢化で人が減っている中、このような取り組みは貴重で大事なことだと思いますが、学生を含めた若者が行きづらいというか、せっかく地元へ帰って来ても就職する先がなくて都会へ行ってしまったり、道路が整備されたので、住まいは都会に置いて、そこから道路を使って田舎へ帰ったり、そういうことが往々に現実問題としてあるのです。静岡県でも少子高齢化が進行しています。ですから、これは公民館だけの問題ではありませんが、やはり地元へ帰って頑張ろうという気持ちがないといけないと思います。そのための取り組みをしてほしいと思いますが、人口の流動などについて教えてください。

藤井――私が15年前に弥栄町に来たときの人口は1,800人で、今は1,400人を切りました。10年少しで400人超が減っています。それは自然減なのか分かりませんが、弥栄町は30年ほど前からかなり手厚い定住施策を実施していました。20年住んだら住宅が1軒もらえるとか、4LDKで駐車場3台分の敷地が付いた住宅の家賃が2万2,000円であるなど、若者定住にかなり力を入れていました。ですから、田舎暮らしを始めるハードルは低かったのですが、定住には結びつきませんでした。やはり孤立してしまっていること、核家

族化していることが一つの大きな問題かと思います。

そこで、公民館としては、まずはそういう人たちが集まって仲間づくりをし、話を聞いて助け合うことを促進させるような活動を始めていかなければならないと思いました。子どもを見ていてほしいとか、病院がどこにあるのかといった相談も含めて、仲間づくりをしていかなければならないと考えたわけです。特に「おいしんぼ倶楽部」を始めたきっかけには、料理教室だけではなく、仲間づくりも視野に入れていました。

これから6次産業を目指すに当たっても、以前は都会に出れば仕事があるという意識が弥栄町にありました。おじいちゃん、おばあちゃんたちは、「こんなところにいるな。どんどん町へ出て立派になってこい」と、若い人をどんどん送り出しました。ところが、今は町に出ても仕事があるわけではありません。そうであれば、弥栄町に帰ってきたい子どもたちに大人が起業のチャンスやきっかけを見せてあげられないかということで、今、6次産業に向けた動きを進めています。実は農業や稲作も、これだけ値段が下がってくると生活が成り立たないといった問題があるのですが、米単体で売るのではなく、何とか別の形になれば、付加価値が付いて売れるのではないかと考えています。大人がそうやって小さな町で楽しく頑張って暮らしている姿を見せることで、1人でも2人でも、よそからのUターンでもIターンでも、まず、1軒の家に子どもを戻すことにつながっていかないかと思ってあがき始めています。

質問――弥栄町の周りの市町村と連携を取っているのか、また、そういった地域は弥栄町と同じような状態になっているのかを伺いたいと思います。そのような連携を経て、別の市区町村と一丸となって何かすることで、若者の招致などができるのではないかと思ったのですが、そういう計画は何かありますか。

藤井――近くは中山間地域ばかりです。どこも一生懸命頑張っているのですが、防災の発信というのが珍しいという評価をいただいています。防災というと、一緒にヘルメットをかぶって避難訓練をするというイメージだったのですが、弥栄町は少し違った視点での防災なので、近隣の公民館でも「それもありなのか」という気づきが出てきたところです。浜田市内には旧中山間地域が4カ所ぐらいあるのですが、それぞれが小さな拠点で地域の人を巻き込んで頑張っていこうということを、少しずつ言い始めてきました。このような都会の備蓄倉庫を目指していければ、生き残るチャンスがあるのではないかと考え、本日は営業も兼ねて参りました。

コーディネーター――ありがとうございました。先ほど、今の人口は1,400人というお話がありましたが、ご紹介いただいた取り組みを見ると、5,000人も、6,000人も、1万人もいるように見えます。人口が何万人いても、それぞれが家に閉じこもって交流がなければ寂れた感じがしますし、交流があってお互いに地域の課題解決や防災対策に取り組むと、密度というか、多くの人が一生懸命に動いているように感じます。人口が非常に少ない、いわゆる消滅可能性都市はいろいろなところにありますが、非常にヒントになるのではないかと思いました。大変興味深いお話をありがとうございました。